

# FD

## 2012 京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —

2012 Mutual Faculty Development

2013年3月 京都大学FD研究検討委員会



- 京都大学FD研究検討委員会では、以下のような活動を行っています。
- 高等教育研究開発推進センターが企画・実施してきた公開授業・検討会を、2008（平成20）年度からFD研究検討委員会の主催事業として年1～4回開催しており、全学的な参加を呼びかけています。
- 2009（平成21）年度からは、公開授業・検討会に加え、文学研究科プレFDプロジェクトとして、同研究科のOD（オーバードクター）が担当する学部生向けゼミナールを公開し、授業終了後検討会を行っています。
- 2010（平成22）年度からは、本委員会主催による「勉強会」および高等教育研究開発推進センターとの共催による新任教員教育セミナーを実施しています。



## 京都大学のFD

FD研究検討委員会委員長 宮川 恒



京都大学ではFDに関する様々な取り組みがおこなわれています。本FD研究検討委員会は2006年に研究科長部会の下に特別委員会として設置され、高等教育研究開発推進センターの協力を得て京都大学のFDを企画・実施してまいりました。本報告書はその一端を学内の皆様にご紹介するために毎年作成しているものです。

京都大学のFDは、一般的にFDの典型となっている啓蒙型ではなく、「相互研修型」FDが自由と自主を基礎とする研究者集団にとってよりふさわしいという考え方を基本に実施しています。相互研修型FDとは、「それぞれに固有の文脈に埋め込まれた自律的な教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、教育する集団として形成されていくことをめざす」（田中毎実前委員長）ものであり、一つの授業を様々な分野の教員が集団的に検討する公開授業・検討会が、その考え方を具体化する取り組みとして最も重要視されてきました。しかし、これは委員長の力不足によるところが大きいのですが、報告書にもあるとおり2012年度公開授業・検討会は1回しか開催されていません。基本的な考え方はなかなか本学教員の意識に浸透しにくいのが実情のようです。参加される教員の方々にとっては、公開される授業が、ご自身の専門分野と直接的に関連していなくとも、カリキュラム全体の中での授業の位置づけや学生との関係といった視点で見えていくと、授業改善そして教育改善へのヒントが数多く得られる機会になっています。何より、教員自身の学生時分とは変わってきた学生を前にして、試行錯誤しながら授業に取り組んでいる多くの同僚と経験を共有できるのは、比較的横のつながりが薄い本学教員にとって貴重なことです。尚一層の積極的な参画をお願いする次第です。

2009年度から本委員会と文学研究科との連携により始まった文学研究科プレFDプロジェクトは、しっかりと成果をあげながら定着してきた感があります。これも教員に加えODなどの正規ファカルティ予備集団が自主的な授業改善・教育改善に向けて活用していただきますことを願っております。また2010年度からは、高等教育研究開発推進センターとの共催による新任教員教育セミナーが新たに実施されており、年々参加者が増加しています。

これまでの活動を維持する一方で、2012年度は、「勉強会」の実施方法を少し見直しました。従来、本委員会委員のみが参加して実施していたところを学内に広く参加者を募り、学生支援や教育制度に関する講演会を開催しました。冒頭で述べた京都大学のFDの基本的な考え方とは異なる一見「啓蒙型」の取り組みですが、提供された話題に関して活発な意見交換が行われ、参加者が相互に研修しあう場となりました。その詳細についても本報告書に掲載していますので、ぜひご参照ください。

京都大学では2013年度から教養教育のいっそうの充実をめざした大きな組織改編が行われます。そのような改革が、「仏造って魂入れず」といったことにならないためにも、FDをうまく取り入れていくのは重要でしょう。本委員会は今後も本来の目的である授業改善・教育改善に向けた取り組みはもちろん、社会及び学生の変容に対応すべく、様々な教育課題に対応するための取り組みも交えながらFDの充実を図ってまいります。



## ◇ 2012.11.29 火

公開授業 10:30 ~ 12:00 (吉田南構内 吉田南総合館北棟 25 教室)

検討会 12:15 ~ 13:15 (吉田南構内 吉田南1号館 201 会議室)

### 「オープン・エデュケーションの世界」

全学共通教育科目A群



飯吉 透 教授

## 1. 科目の概要

### (1) カリキュラム上の位置付け

世界中に広がるオープンエデュケーションは、高等教育の在り方そのものを大きく変えつつある。本授業の目的は、最新のオープンエデュケーションのトレンドや事例を紹介し、その教育的・社会的可能性について、グループ・ディスカッションなどを通して探究と理解を深めることにある。また、この講義は、京都大学国際教育プログラム (KUINEP : Kyoto University International Education Program) としての開講科目であり、授業は英語で行われる。

(2) 授業形態 講義

(3) 単位数 2単位

(4) 対象学生 全回生

(5) 受講者数 11名

### (6) 授業のテーマと目的

オープンエデュケーションの中心的価値、可能性、課題について理解する。学習方略、方法などの基本的スキルやオープンエデュケーションにおいて重要な効果的学習のための知識を習得する。オープンエデュケーションのさまざまなリソースに精通する。学部、大学院、そして生涯教育における個人的あるいは集团的学びを強化し、加速する理想的な方途を定義する。

### (7) 成績評価方法

評価は授業中、あるいはオンラインでの議論への参加、個人・グループによるプロジェクト、レポート、発表によって行われる。試験は実施しない。

## 2. 公開授業

### (1) 授業計画上の位置付け

前回(11月15日)の講義で、学生は4つのグループに分かれ、それぞれが2つずつオープンエデュケーションのウェブサイトを選択し、学習者として利用・レビューすることが求められていた。それに基づき、それぞれのサイトについて質・有効性・インパクトを及ぼしうる規模についてコメントをまとめ、グループで発表を行う。今回の授業では2グループが発表し、その後に講師がレクチャーを行った。

### (2) 公開授業の流れ

定員100名程度の講義室。学生は教室前方に着席する。パワーポイントスライド、ビデオを使用する。あらかじめ学生はグループ分けされており、事前に準備した発表をグループごとに行う。また、授業の中でグループ・ディスカッションも行う。当日出席した学生は13名で、1回生が6名、2回生が2名、3回生が1名、4回生が4名。

### 10:30 導入と準備

授業開始前からIBMの人工知能システム「ワトソン」が、アメリカの人気クイズ番組ジオパディーに参加し、優勝してしまったというビデオが流された。機械でも学べるのだから、人間や学生はもちろん学べるだろう、そして、どういう学びの方法やスタイルがあるだろうかという問いかけを行い授業に入った。



**10:35 ビデオクリップの視聴と議論**

スミソニアン・スチューデント・トラベル社作成の、激動する世界における教育の未来と課題に関するビデオ「21世紀の教育とは何か」(約2分強)を視聴し、このような時代の教師に求められるもの、そして学習者に求められる資質とは何かについて、学生と議論しつつ考察した。学生からは、学習者は教師であり、研究者であり、学んだ知識を統合する人間、そして探検者でもなければならぬ、などの意見が出た。

**10:45 前回の授業のフィードバック**

前回の授業に関して学生から寄せられたコメントのいくつかを紹介した。オープンエデュケーションのウェブサイトの有用性がよくわかったという意見、英語スキルについて、不安ではあるが頑張っていきたい、グループワークは復習のために非常に役に立つ、などの意見が紹介された。

**10:50 グループ発表(1)**

グループ発表の形式、内容について簡単に説明が行われた後、一つ目のグループがCourseraとOpen Learning Initiativeという二つのオープンエデュケーションウェブサイトについて、そのインタラクティブな利点を強調した発表を行った。

**11:07 グループ発表(2)**

二つ目のグループは、JOCWとCourseraを選択して発表を行った。日本と米国のオープンエデュケーションのウェブサイトの比較が行われ、分野別に授業がカテゴリ分けされたCourseraと大学ごとに分けられているJOCW、JOCWの講義数の少なさといった、日米のサイトの違いが述べられた。

**11:19 発表に関する質疑応答**

二つの発表についての質疑が行われた。提供される講義のレベルが、基礎的なものに偏っているのではという質問がされた。これについて基礎的な講義というのを提供するときのメリットとして、対象者が多いということがあげられるが、オープンコースウェアのインパクトを最大化するためにこのような授業選択になっているのであろうという回答がなされた。

**11:25 レクチャー**  
**Massive Open Online Courseについて**

講師からMassive Open Online Course(MOOC)についての説明がなされた。MOOCとOCWの違いとして、OCWが講義のオンライン視聴を目的としているのに対して、MOOCの方は受講し、課題を提出すれば、単位はもらえないが修了証を受け取ることができることが挙げられた。修了率について学生に質問をしたが、学生の答えはさまざまであった。修了者数は年に7000人程度であるが、実は修了証には難しいものと簡単なものの二種類があり、難しいものは2000人程度にしか授与されない。登録者数が15万人ということを考えるならば、これは非常に少ないという指摘がなされた。また、MITによるMOOCサイトであるMITxなどの例が挙げられ、MOOCの動きが広がっていることにも言及がなされた。

**11:31 MOOCとキャンパスでの大学教育**

拡大していくMOOCに対して、懐疑的な声もあることが示された。例として、プリンストン大学副学長がニューヨーク・タイムズに寄稿した文章がスライドで示された。インタラクションのないオンラインでの授業は、プリンストンのキャンパスでの教育と質的に全く異なるものであり、MOOCによって単位を与えることは考えていない、という意見であった。同様の意見は、OCWについてMITの学長によっても表明されている。

**11:38 MOOCによる単位認定**

これに対して、MOOCの単位認定が2000のカレッジと大学によって認められる準備が進んでいる現状も紹介された。これはアメリカ教育協議会(American Council on Education)の認定システムによって可能になったものであり、いわゆる従来型の大学教育に対して、オープンエデュケーションの制度的基盤も整備されつつあることが述べられた。

**11:38 オープンエデュケーションによる**  
**単位認定を認めるべきか:ディスカッション**

こうしたMOOCの隆盛については、ネット上の掲示板でも議論されていることが紹介された後、学生にいくつかの問いが投げかけられた。それは、オープンエデュケーションが優勢になった場合、「学習者、教師、そして学びがどのように変容するか」という問題についてのものであった。これについて学生が数人のグループに分かれて議論をし、その内容をそれぞれ発表した。その後、授業感想レポートのためのリフレクションシート記入の時間が設けられ、授業が終了した。



### 3. 検討会

◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員



◇ 非常にたくさんのことを学んだ。TA をどのように使うかや評価をどのようにするかといったことが今後必要になるのではないかと議論されているのもよかった。もちろん必ずしもすべての答えについてディスカッションする時間はなかったし、学生が全員それに対する答えを出したわけではないが、こういうシステムで行う新しい方法をきちんと提示されていた。しかも、一方向ではなく、何回かに分けて学生とキャッチボールしながらという点はさすがである。プロフェッショナルなプレゼンテーションに慣れると、決められた時間の中で情報を詰め込んで、こちらの言いたいことを全部言ってしまう傾向があるが、そうではなくて、学生とのやりとりに配慮がなされていてうまく構成されていた。私自身は、それらの活動をどのように評価するのか、それらを有効な評価のシステムに乗せるのかということが最大の問題点だと感じていたのだが、それについて今後考える一つのいい機会になった。また、机が可動式ではないから仕方がないが、小人数のディスカッションであればみんな向き合って座れたほうがよい。基本的には非常に素晴らしい授業だったと思う。そのノウハウや価値をもっと活用していくべきだ。

◆ 面白かったのは、最初の頃、日本人の学生は、英語に関する不安があって、「大事なところは日本語で言い直してほしい」などと頼まれたが、それでは英語で授業を受ける力がつかないから、という理由で断っていた。しかし今日の授業も含めて最近では、だんだん英語を使うことに対する不安がほとんどなくなってきた、という印象がある。また、留学生が5、6人いるのだが、

彼らは「もっと日本人学生の意見を聞きたい」と授業感想レポートの中で言っていたので、そのようなコメントを選んで次の授業の冒頭で紹介することで、日本人の学生たちをエンカレッジした。それが結構効いたようで、「自分たちの意見が求められているのだ」という意識が日本人の学生に芽生えて、それを境に随分日本人学生の授業での発言に対する態度などが変わったかなと思う。学生による授業感想レポートは、自分自身の授業改善にももちろん役に立つのだが、学生にもコメントをフィードバックすることでコミュニティの形成にも役立っているようだ。

◆ 今回は公開授業ということで、幾つものモードを入れた。普段はそのうちの二、三しか行わないということはあるが、今日の授業は、皆さんに「本コース全体としては、こんな感じで行っている」ということを「お試し的」に知ってもらい意味合いを込めて、全体的にデザインした。授業をご覧になってお分かりになったと思うが、授業中に私から話したいことは常に沢山あるのだが、自分を抑制して、言い過ぎないように努めている。学生に発言させると、大概みんないい意見を言ってくれるので、こちらが考えていないようなことも言ってくれるので、こちらから「蓋」をかぶせないほうがいいかなと思う。学生は、時々「目から鱗」のようなことも言ってくれるので、私も勉強になることが多い。ある部分、学生の方が発想が進んでいる部分もあり、私は問題提起をするだけで、後は彼らに自由にナビゲートしてもらったほうが授業が盛り上がることもある。もちろん彼らがよく分からないところがあれば詳しく説明するし、もう少し分かれば地平が開けるような場合には、少しヒントをあげる。そういったことに気を配っている。スモール・ディスカッションの際には、こちらからグループメンバーをランダムに選んでいるように見せているが、実はランダムではなくて、国籍などのバランスを考えて構成している。また、グループごとの発表と言いながら、最終的には、全員に発表させ、全員に発言を求めている。スライドでいくつか紹介したコメントなどは、学生の文法や綴りのミスそのまま提示する。「それでいいのだ」ということを示すため、敢えて直さない。「とにかくコミュニケーションが大事で、伝えようとするのが大事なので、細かいことは気にしないでいこう」というメッセージである。このコースを始めて早々に分かったことは、「留学生のモチベー



ションが高い」ということである。ただ英語ができるから発言するというわけではなく、「リーダーシップを取りたい、自分たちは日本人の学生も助けたい」といったような意気込みもあって、ファシリテーションもうまいし、スモール・グループのディスカッションでも日本人学生の意見も一人ずつ聞いてくれている。この授業では、分からないことについて考えて、答えを探り出すという力、今ふうと言えばグローバル人材に必要とされているような力を育てていきたい。

- ◆ コース・サイトも作っていて、そこに毎回使用したスライドや学生のコメントを全て載せている。また、授業中に出た質問は、全部コース・サイトの掲示板にもう一度リポストしている。なぜかという、特に初期のころに、「授業中の英語でのディスカッションに入っていけない、ついていけない、しかし自分は言いたいことがあった」という学生が、遅ればせでもいいから自分が言いたかったことを、時間差で掲示板に載せられる機会を提供したかったからだ。授業中の発言とその時間差で、オンラインを併用するブレンデッド(blended)の良さを考えたりしている。

- ◇ 参考になったのは、学生のコメントを上手に紹介されていたということである。私も実は、授業で学生のコメントを毎回取っているのだが、これをどう活かしたらよいか分かっていなかった。今回の授業では、それを上手に紹介されていて、早速使わせていただこうと思う。また、日本人の学生がなかなか発言しないのをしゃべれるようにエンカレッジするというのも印象に残った。



- ◇ クラスの構成を教えてください。何人ぐらいの外国人学生がいて何人ぐらいの日本人学生がいるのか、何回生が何人ぐらいいるのかが分かるとありがたい。学生が

前に出て議論するのは非常によいことだと思うのだが、彼らは次に何を期待しているのだろうか。また、授業の成績評価をどのようにお考えか、例えばレポートを出させるのが試験を行うのか。

- ◆ クラスの構成については、今日来た学生の内訳は、一回生が6人、二回生が2人、三回生1人、四回生4人。この授業は全学共通科目なので、医学部、理学部、経済学部、教育学部などさまざまな学部からの参加者がある。海外の学生は5人いて、それぞれドイツ、カナダ、アメリカ、タイ、中国など。
- ◇ 日本人の学生はよく発言していたと思う。
- ◆ 最初は、留学生でも3人くらいしか発言してくれずに、非常に静かなクラスだった。
- ◇ クラス全体で非常に発言が多く出ていたし、日本人と留学生とであまり差を感じなかった。
- ◆ 評価に関しては、出席の比重は40%程度である。ただ、出席簿にチェックするだけではなく、毎回の授業感想レポートにきちんと意味のあることを書いて貢献していることが大事である。授業中のディスカッションやプレゼンテーションの様子もきちんと見ている。期末には、このコースを通じて学んだことと自分とこれからの教育の関わりについてどのように考えるか、というテーマでレポートを書いてもらう予定である。授業内容に関する試験などは、行わない。また、点数をつけるときには、私なりに考える「グローバル人材として必要な力」も評価して加味している。ただ、ご覧になった通り、出席している学生はみんな頑張っている。成績にはそんなに差はつかないと思う。
- ◇ 毎回彼らが自宅に帰って来週に備えるような課題は用意しているか。
- ◆ 学生たちは授業内で十分に触発されていて、授業感想レポートでも、「自宅に帰ってもっとやってみたい、調べてみたい」と言ってくれている。コースの後半になったら議論が深まるような宿題を少し出そうかと思うが、ただ家で勉強させるためだけの宿題にするつもりはない。



◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員



◇ 日本人の学生の視点から見ると、語学の障壁は高いと思う。先ほど間違ってもいいから発言してもらおうように仕向けているという話を聞いて、初めの第一歩は誰でも踏み出しにくいものだが、それに対する心づかいが感じられた。人数が増えていくと、自分が発言しなくてもほかの人が発言してくれると思ってしまうので、このぐらいの人数はちょうどよく議論できてほかの人の意見も聞けるというところなのかなとは思う。一方で、規模の大きい授業になった時にはどのようにすべきなのかはまた難しい問題ではないか。

◆ リーダーシップを取れる学生を牽引力にしてやれば、大規模な授業でもできるというイメージは持っている。語学のところはすごく大事なポイントで、この仲間同士だったら高度な英語ではなくてもよい、という安心感は日本人学生の間で出てきたかなと思う。ただし、英語を使うこの授業で妥協しない点もある。大事なところを日本語で強調することはしない。ゆっくりしゃべることもしない。この二つを受け入れてしまうと、留学生は盛り上がらない。今週が6回目、学生たちが皆ついてきてくれているのは良かったなと思う。必ずしも英語はうまくないが積極的に英語で発言する日本人学生が出てきているし、それで本人の自信がつけばよい。それを見て、次は自分も発言したいと感じる学生もいるはずだ。

◇ 私は、ネイティブの人の英語は流暢すぎてついていけないし、アジア系の人の英語は発音が聞きなれずによく分からない。日本人のしゃべる英語もまたよく分からない。しかし、現実世界の会話もそういった多様な

中で進んでいくわけだから、まさにこういう経験をしていかなければならないのかもしれない。日本人でなければ出てこないだろうという発想もあったし、多様な視点からの意見が出てくるのは非常に面白かった。京大生らしい質の高い意見も随所に見られた。京大にもいい授業はたくさんあるということをアピールしていければよいと思う。

◆ コース初期のコメントで、「オープンエデュケーションはどうでもよくて、留学がしたいから英語の授業に慣れるために受講している」と堂々と書いてくれた学生が何人かいた。ショッキングではあったが、教育というのは学ぶことが本質なので、それを足掛かりにして、この授業で英語を使ってコミュニケーションのスキルを上げて、内容も理解してもらえればよいと思っている。

◇ 最後のディスカッションにもあった通り、オープンエデュケーションにも得るものと失うものがある。京大でも講義やコースを体系化することが大事だと言われているが、体系化すると何か失うものもあるので、よく議論して整理して京大らしさの残る方法を選ぶステップが必要だと思う。

◆ 京大だけではないかもしれないが、学生から出て来るアイデアや発想には素晴らしいものがある。それをどうやって全体が進んでいけるような力に結集していくことができるかが一番大事だと思う。

◇ 私もクイネップを担当していて、ユニバーサル・トピックでディスカッションをさせて経験を出す過程で文化的な話が出て来る。留学生が日本人と議論する中で、ある共通のテーマだが、それぞれ違う経験をどう見るのかということに彼らは希望しているようだ。英会話の授業を目指しているつもりはないのだが、私の授業でも必ず「英語の勉強に来た」という学生がたくさんいる。しかし、そういう授業ではないことを最初に言って、あくまで内容ベースの授業を行って、アクティブ・ラーニング的なディスカッションやワークを行えば、自然に彼らの要求も満たすことができるというのは、日本で英語講義を行うことの一つの特徴かなと思う。



- ◆ それぞれ違った目的とか希望があって授業に来るのを汲んであげる必要がある。最初は留学生ばかりが発言しがちで、しかも彼らは文化的な背景や価値観の違いから突拍子もないようなことを言う。しかし、それを日本人の学生が聞いて、「考えていることが違う人間がいる」ということを早いうちに気付かせてあげると面白いセッティングになる。最初は英語にしか興味がなかったという学生も、「新しいことを学べるのかもしれない」という期待感を持ち始めているのが感じられた。教員の側としては、「いかにして複数の視点の存在をできるだけ早い段階で『見える化』してあげるのか」ということが大事なのではないか。

- ◇ 学生から出て来る意見やコメントに合わせて、もう少し深めていくようなことをおっしゃっていた。最初に取り上げたコメントの中には、こういうことを学んだとかこういうことが面白かったとかいったことはあるが、授業のコンテンツに関わってそれが深まっていくようなコメントはあまりないと感じた。教員は学生が持っているものを引き出して、他方で知識があるからこそ見えてくるような、学生のナイーブな経験を取り出しつつも、教員が少し知識を乗せて、彼らの経験を少し精錬させていくというプロセスが醍醐味かなと思うが、先生はどのようにお考えか。

- ◆ 工学部の先生が、オープンエデュケーション全体のことを言われていたのだが、学生を運転席に座らせると、彼らの知っている道しか行かない。自分から見える範囲が GPS を使って見える範囲と違うからである。全体図を俯瞰してあげるとか、もっと深いところに連れて行ってあげるとか、この点が実はオープンエデュケーションの一番弱い点で、今私の行っているアプローチの難しいところでもある。オープンエデュケーションが学びの多様性や個人対応ということを強調しすぎているあまりに、そういうところまで持っていくのはなかなか難しいことだと感じている。ただ、「教員に言われたからこれをこうやる」というだけの授業になってしまうのは避けたいと考えている。

## 4. 公開授業担当教員のコメント

KUINEP 全学共通教育科目として新しく開講された本コースは、「オープンエデュケーション」という 21 世紀の新しい教育の在り方を、いわば「現在進行形」で扱わなければならないことに加え、十数名という比較的小規模なクラスにも関わらず、学部・学科・回生などが多様で、留学生や英語のレベルも異なる日本人学生が混合する中で教える、というチャレンジに満ちたものでした。その中で大事にしたかったのは、学生たち一人ひとりの「自分のこれまでの人生において、どうやって教育と関わってきたのかという経験や思い」をクラス全体で共有しながら、「これからのグローバルで変化の激しい社会において教育はどうあるべきか、また自分は今後どのように教育と関わっていくべきか」について、オープンエデュケーションが投げかける可能性や課題について皆で議論し考えていく中で、学生たちが積極的に学び合い教え合える「学びの場」を育てることでした。

この公開授業を行うに当たって、自分なりに試行錯誤しながら考案した授業における様々な工夫を、参加していただいた教員や大学院生の皆さんにどのように見ていただけるかを楽しみにしていましたが、検討会では、様々な観点から、本コースの今後の改善に役立つ有益なご意見やコメントを多々いただき、また「自分が教えている授業の参考にもしたい」と言ってくださる先生がたもおられ、互いにとても実り多い研鑽の機会となったことを大変嬉しく思い、大いに感謝させていただく次第です。



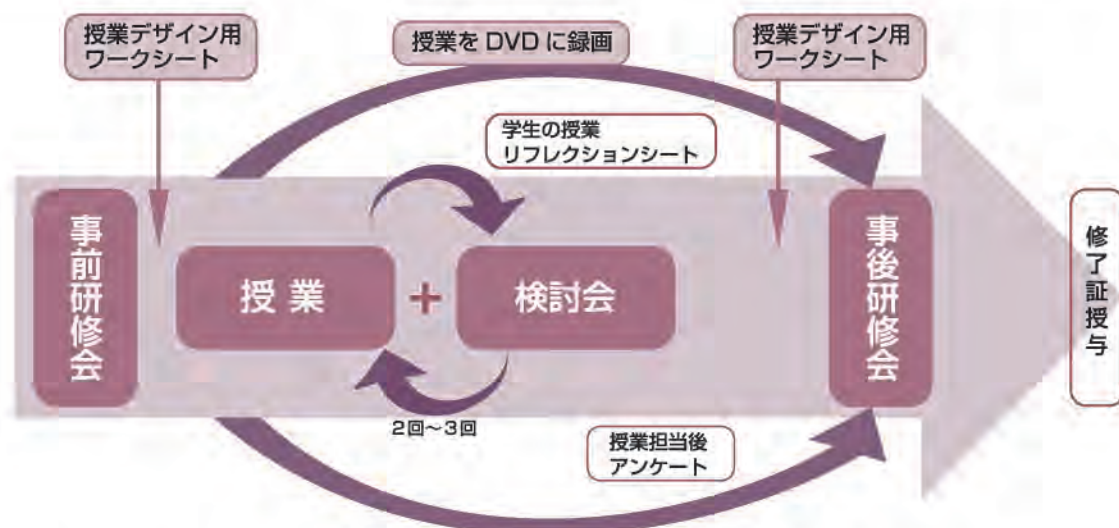


## プレFDとは？

プレFDとは PFF (Preparing Future Faculty) プログラムとも呼ばれ、大学教員のキャリアに向けて大学院生（主に博士課程学生。ポスドクも含む）を準備させることです。日本国内でも、研究大学を中心として近年様々な取り組みが見られます。大学教員の職務を教育、研究、社会貢献、管理・運営に分類した場合、プレFDは本来、それぞれの役割に関する理解、知識や技術の獲得、あるいは意欲や信念の醸成などをめざすものですが、近年では、とりわけ大学教育への準備を意図した取り組みが多くなっています。本学での取り組みもその一つです。

## 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する文学研究科のオーバードクター（OD）によるリレー講義形式のゼミナールであり、事前研修会、公開授業とその検討会、そして年度末の研修会によって構成されています。具体的には、全ての授業を公開とし、毎回の授業終了後20分程度の授業検討会を行います。一人の講師は2回から3回の授業を行い、自分の授業が無い時には他の講師の授業を参観、検討会への参加という形でゼミナールに参加します。全ての授業が終了した段階で研修会を行い、自分自身の教育活動を振り返る作業を行います。なお、このプロジェクトの企画・運営は、高等教育研究開発推進センターの協力のもと行われています。



## 2012年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

- |        |                             |
|--------|-----------------------------|
| 伊勢田 哲治 | 文学研究科准教授（総括コーディネーター）        |
| 田中 和子  | 文学研究科教授（行動・環境文化化学系コーディネーター） |
| 福谷 茂   | 文学研究科教授（哲学基礎文化化学系コーディネーター）  |
| 小野澤 透  | 文学研究科准教授（基礎現代文化化学系コーディネーター） |
| 伊藤 和行  | 文学研究科教授（基礎現代文化化学系コーディネーター）  |
| 小城 拓理  | 教務補佐員（行動・環境文化化学系）           |
| 田林 千尋  | 教務補佐員（哲学基礎文化化学系）            |
| 田中 一孝  | 教務補佐員（基礎現代文化化学系）            |

- |       |                    |
|-------|--------------------|
| 大塚 雄作 | 高等教育研究開発推進センター長    |
| 松下 佳代 | 高等教育研究開発推進センター教授   |
| 田口 真奈 | 高等教育研究開発推進センター准教授  |
| 坂本 尚志 | 高等教育研究開発推進センター特定助教 |
| 田川 千尋 | 高等教育研究開発推進センター特定助教 |



## 文学研究科プレFDプロジェクトを振り返って

### ■総括コーディネーターから

本年度も一年間プレFDをつつがなく行うことができた。このプロジェクトも4年目となり、ノウハウも十分に蓄積されて、すっかり安定してきた観がある。おかげで総括コーディネーターの私も大変楽をさせていただいた。もちろん、それは、このプロジェクトを支えた各系のコーディネーターの方々、教務補佐員のみなさん、プレFDプログラムに参加して研鑽されたODのみなさん、貴重なフィードバックをくれた学部生のみなさん、すべてのご協力があったことである。感謝の意を表したい。このプログラムの将来だが、実は決して明るいとはいえない。京都大学全体の予算が縮小し、文学研究科も緊縮財政を迫られる中で、こうしたプロジェクトのための経費を捻出し続けることは容易ではない。しかし、実際に授業や事後検討会に参加してみようと思うのは、当初想像していた以上にこのプロジェクトが参加者に大きな効果をもたらしているということである。現在の規模で続けていくことは難しいかもしれないが、何らかの形で継続的にこの取り組みが続くことを願ってやまない。

(文学研究科准教授 伊勢田 哲治)



### ■各系のコーディネーターから

#### 行動・環境文化学系

行動文化学系の今年度後期の入門ゼミナールでは、3人の講師により合計9回のプレFD授業が行われました。どの講師の方も、毎回の授業の反省を次回の授業に活かして努力されている様子がうかがえました。回数を重ねるにつれ、受講生の反応や様子を見ることも少しずつできるようになっているように思いました。また、他の人の授業を、受講する立場ではなく、授業する側として見学することは大変貴重な経験であることも、改めて感じました。

自分が受けてきたたくさんの授業、また、自身の授業経験を通して痛切に感じているのは、学生たちに伝えること、学生をインスパイアすることの大切さと難しさです。今年度、プレFDを体験された講師の方々には、さらにFDを超越するような存在感のある教師を目指していただけたらと願っております。

(文学研究科教授 田中 和子)



#### 哲学基礎文化学系

このような授業が行なわれていることはまだ教員の間にもよく知られてはいないのではないと思う。本年度コーディネーターとしてかかわってみて感じたのは、さすがは京大だな、ということである。講師として登場するODたちのなかには、大学の教壇に立つのはこれがはじめてという人も結構いた。もちろんご本人は眠れぬ前夜を過ごしたかもしれない。しかし参観している側からすると、皆さん達者で堂々とした先生ぶりだったというほかなかった。受講者も先生方の高水準の授業を熱心に聴講していた。私自身もいい勉強をしたという思いがいつものこった。こうなると授業後の検討会は自分の感想や疑問をすぐに講師やほかの参観者にぶつけられるありがたい場にはやがわりである。高等教育研究開発推進センターの先生方からはいつも新鮮な観点をお聞きすることができた。とかく「外圧」のように感じられがちなFDであるが、少なくとも京大ではそういうものにならないようになされている努力のひとつがこの「プレFD」だろうと思う。いちどぶらりと参観においでになっては、と先生方におすすめしたい。

(文学研究科教授 福谷 茂)

#### 基礎現代文化学系

かつて学生のアルバイトの定番といえば、塾講師と家庭教師であった。もちろん、他の職種よりも時給がよかったからである。しかし、講師業も長引くデフレの例外たりえず、たまに時給のよい講師の口があっても勉学に差し障るほどの激務であることが多いと聞く。そのようなわけで学生たちは講師業から離れていったが、このことは学生たちが「教師」の経験を持つ機会を失うことをも意味していた。「研究者」として生きていくために必要とされる「教師」としての技量を学外の社会で磨く機会が失われた以上、大学がそのような機能の一端を担わねばならない。プレFDが必要とされるようになった背景のひとつであろう。プレFDの授業担当者たちには、口うるさい京大生を納得させるという課題が課されるが、そこで必要とされる技量は、集中力のない中・高生に英文法を理解させるための技量と、存外共通点が多い。教師でも学生でもない「コーディネーター」という立場から授業を眺めて、改めて感じたことである。

(文学研究科准教授 小野澤 透)



## 2012年度文学研究科プレFDプロジェクトスケジュールと授業テーマ

### ■前期スケジュール

文学研究科プレFDプロジェクト事前研修会  
2012年4月5日 13:00～14:30 京都大学文学部新館

■行動・環境文化学系ゼミナール I  
2012年4月26日、5月10日、毎週木曜日1時限  
検討会 10:20～10:40

〈授業テーマ〉  
山崎 瑠子 印欧語比較言語学とはーデータと方法論ー  
金 京愛 言語比較による発見・日本語の発見

■哲学基礎文化系ゼミナール I  
2012年4月12日～7月26日、毎週木曜日2時限  
検討会 12:00～12:20

〈授業テーマ〉  
濱崎 雅孝 哲学はキリスト教から何を学べるか?  
千葉 清史 カントの超越論的観念論  
中嶋 優太 「善の研究」の成立とその周辺  
永守 伸年 倫理学と信頼の問題  
田中 一孝 フィクションと感情ー古代ギリシアにおける「芸術」理論ー前期の総括セッション

■基礎現代文化学系ゼミナール I  
2012年4月12日～7月26日 毎週木曜日5時限  
検討会 18:00～18:20

〈授業テーマ〉  
小野 容照 「野球」を通して考える朝鮮半島の近代  
佐藤 夏樹 ラティーンノ像の形成  
稲葉 肇 原子の存在をめぐる  
網谷 祐一 理性と進化  
坂 堅太 戦後日本における文学と政治の関係について  
吹戸 真実 冷戦期アメリカ合衆国の中台政策と東アジア

### ■後期スケジュール

■行動・環境文化学系ゼミナール II  
2012年10月4日～2013年1月10日 毎週木曜日1時限  
検討会 10:20～10:40

〈授業テーマ〉  
石井 和也 都市と地域の社会学  
富田 愛佳 ことばのフィールドワークータイ・ルー語の事例ー  
川田 拓也 コーパスを用いた言語研究ーフィラーの分析を中心にー  
翁 和美 認知症の福祉の場の社会学

■哲学基礎文化系ゼミナール II  
2012年10月4日～2013年1月17日 毎週木曜日2時限  
検討会 12:00～12:20

〈授業テーマ〉  
杉本 俊介 「倫理」とは何か：ピーター・シンガーが巻き起こす論争  
古荘 匡義 宗教について考える  
薄井 尚樹 「相手を理解すること」を考えるーデイヴィッドソンを手がかりにー  
矢頭英理子 近代の女性像  
田鍋 良臣 「神話の哲学」入門  
後期の総括セッション

■基礎現代文化学系ゼミナール II  
2012年10月13日～2012年1月26日 5時限  
検討会 18:00～18:20

〈授業テーマ〉  
中尾 央 進化発生生物学の哲学  
川崎 陽 朝鮮における「皇民化」政策と朝鮮  
富永 望 イギリスから見た戦後天皇制  
大西勇喜 科学的実在論争入門  
山本 昭宏 戦後日本の核エネルギー認識の構築とその変容

文学研究科プレFDプロジェクト事後研修会  
2013年2月14日 13:30～17:15 吉田南1号館

## 『未来の大学教員を育てるー京大文学部・プレFDの挑戦』

本書は、本年度で4年目を迎えた文学研究科プレFDプロジェクトの立ち上げの経緯、実際の運営、その効果等について、文学研究科、高等教育研究開発推進センター双方のスタッフが執筆した、プロジェクト全体の記録である。以下がその目次であり、2013年3月に勁草書房より出版される予定である。

『未来の大学教員を育てるー京大文学部・プレFDの挑戦』 田口真奈・出口康夫・高等教育研究開発推進センター編著

### 目次

刊行に寄せて 京都大学文学研究科長・文学部長 服部良久

本書の内容と構成 (田口真奈)

#### 第I部

ドキュメント・プレFD (出口康夫)

#### 第II部

第1章 日本の大学教員養成システムとOD問題 (松下佳代)

第2章 プレFDとは何か (田口真奈・松下佳代)

第3章 京都大学のプレFD活動

ー相互研修型FDをめぐる葛藤史に焦点づけてー (田中每実)

第4章 プレFDプロジェクト誕生の背景 (学販直行)

第5章 プレFDプロジェクトの概要と実施体制 (田口真奈・出口康夫)

第6章 教務補佐員の仕事 (田林千尋・赤嶺宏介)

第7章 事前・事後研修会のデザインと実際 (田口真奈)

第8章 プレFDプロジェクトを通じた参加者の変化 (溝上宏美・杉山卓史・三宅岳史)

第9章 学生の声を通して理解するプレFDプロジェクト (半澤礼之・小城拓理)

第10章 プレFD研修プログラム・コーディネーターの二年半 (永井和)

おわりに 高等教育研究開発推進センター長 大塚雄作

#### 資料

1 京都大学文学部・文学研究科学修の仕組み (坂本尚志)

2 京都大学文学部・大学院文学研究科の教育の流れ (坂本尚志)

3 プレFD授業題目一覧(2009-2012年度)

4 プレFDポスター

用語解説 (坂本尚志・田川千尋)



## 第6回勉強会

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post06.php>

### 国際シンポジウム

#### 「ピア・インストラクションによるアクティブラーニングの深化 (Deepening Active Learning with Peer Instruction)」

2012年10月10日に、FD研究検討委員会第6回勉強会として、アメリカ・ハーバード大学教授エリック・マズール氏 (Eric Mazur) を招聘し、国際シンポジウムを開催しました。マズール氏はハーバード大学において主専攻である光物性の分野で様々な研究プログラムを主導しており、その活躍は国際的に知られていますが、同時に、自身の研究グループにおいて教育研究に力を入れており、1990年には大規模講義における双方向的な教授法としてのピア・インストラクションを開発しました。この教授法はアメリカだけでなく、世界中の様々な科学分野において実践されています。本シンポジウムでは、マズール氏の講演とワークショップに続き、京都大学の心理学の授業での実践例もふまえながら、学生が互いに学びながら理解を深めていくような大学教育のあり方について議論が行われました。

### 講演・ワークショップ

講演では、マズール氏が、ピア・インストラクションの概要を自身のハーバード大学における物理の授業を例に解説しました。ピア・インストラクションとは、学生同士の議論を組み込んだアクティブラーニング型授業の一つです。ConceptTest と呼ばれる課題を与え、クリッカーを使って個々の学生の理解度を測るとともに、学生同士の議論を通じて、授業への認知的・感情的な参加を促しながら、基本的な概念についての深い理解を目指しています。大人数授業で行われること、事前学習文献を与えて授業外学習とリンクさせていることも特徴です。講演は、実際に参加者にクリッカーを使用してもらい、ディスカッションも取り入れたワークショップ形式で進められ、参加者がこの授業形式を実際に体験することができるものでした。

### パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、ピア・インストラクションの事例報告として溝上慎一 (高等教育研究開発推進センター准教授) が自身の心理学の授業における実践を報告しました。この報告では、学生の授業へ



#### ❖プログラム

開 会	13:30-13:40	飯吉 透(京都大学) 開会挨拶・趣旨説明 進行役：田口真奈(京都大学)
基調講演 / ワークショップ	13:40-15:10	エリック・マズール(ハーバード大学) 「Peer Instruction: Promoting Deep Understanding (ピア・インストラクション： 深い理解を促進する)」
	15:10-15:30	休憩
パネ ル	15:30-15:55	溝上 慎一(京都大学) 「京都大学の心理学の授業における ピア・インストラクションの実践 —大教室でのアクティブラーニング」
	15:55-16:10	松下 佳代(京都大学) 「アクティブで深い学びのための仕組み」
	16:10-16:20	飯吉 透 「教育イノベーションの育成と普及」
	16:20-16:30	エリック・マズール コメント
	16:30-17:20	ディスカッション
閉 会	17:20-17:30	大塚雄作(京都大学) 閉会挨拶





の参加態度が積極的になるという利点と同時に、課題が作りにくいという問題点も指摘されました。しかし、ピア・インストラクションは他者とのインタラクションを通して理解が深まり、協同学習を作り出す授業であることが強調されました。続いて松下佳代（高等教育研究開発推進センター教授）がアクティブラーニングをめぐる問題点を整理し、外的にアクティブだけでなく内的側面でもアクティブであることの重要性を強調するとともに、ディープ・アクティブラーニングの提案を行いました。飯吉透（高等教育研究開発推進センター教授）からは、このような教育イノベーションを普及、持続、発展させていくために、集会的文化の醸成とそれに基づく教育知コモンズの構築の重要性が強調されました。

最後にマズール氏より、このような授業法を定着させるのもう一つ重要な点として、評価の方法を変えていくことの意義が指摘されました。フロアとも活発な意見交換が行われ、ピア・インストラクションの大きな可能性を感じさせる会となりました。

参加者は113名（うち外国人6名）でした。なお、当日の様子は、京都大学 OCW (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>) にて公開されています。

## 第7回勉強会

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post07.php>

第7回「勉強会」は、2012年11月26日（月）14：00～16：30、附属図書館3階ライブラリホールにて、学生が抱えるメンタル面での問題、障害に関わる問題についての講演によって実施されました。FD研究検討委員会宮川恒委員長の挨拶、学生担当理事補間藤徹教授の趣旨説明に引き続き、「学生が抱えるメンタルヘルス上の問題点と対応」と題して、カウンセリングセンター青木健次教授より講演があり、続いて、「本学における障害のある学生への支援体制」と題して、障害学生支援室コーディネーター村田淳氏より講演をいただきました。本委員会以外にも公開され、39名の参加（内、FD研究検討委員15名参加）があり、熱心な質疑応答が行われました。質疑のなかには現実の切実な体験に関わるものも含まれており、本学の教育実践においても、メンタル面での問題や障害をもつ学生への対応がFDの重要な課題になりつつあることが窺えました。そのような課題に直面したときに、カウンセリングセンターや障害学生支援室といった、教育をサポートするための部署が京都大学にもいろいろと備えられています（<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/resource/2012support-resource.pdf>）ので、ご活用いただければと思います。

さらに、2013年3月19日（火）10：00～12：00に、文学研究科新館2階第3講義室にて、お茶の水女子大学教育開発センター半田智久教授をお招きして、FD研究検討委員会委員、教育制度委員会委員、各研究科長及び教務事務担当者等を対象とした GPA 制度をテーマとする第8回勉強会が開催されています。



## 第8回工学部教育シンポジウムの実施

平成24年11月30日(金)16時30分～19時45分、桂キャンパス桂ホールにて、第8回工学部教育シンポジウムが開催され、約160名の工学部教員及び工学研究科大学院生が参加しました。

16:30～16:35 開会挨拶 (工学部長 北野 正雄)

16:35～17:05 話題提供

「主体的学びをいかに実現するか—中教審答申と自学自習実態調査に基づいて」

(高等教育研究開発推進センター 大塚雄作)

17:05～17:35 話題提供

「新しい教養・基礎教育の実現をめざして—国際高等教育院構想」  
(工学部長 北野 正雄)

17:35～17:45 休憩

17:45～18:45 教育改善に向けて

私の授業—アンケート結果を受けて—

- |           |        |
|-----------|--------|
| 1.地球工学科   | 伊藤 禎彦  |
| 2.物理工学科   | 長谷川 将克 |
| 3.電気電子工学科 | 土居 伸二  |

18:45～19:05 「成績データベースについて」

(建築学科 加藤 直樹)

「委員長総括」

(新工学教育プログラム実施専門委員会委員長 三ヶ田 均)

19:05～19:45 ディスカッション



工学部教育シンポジウムは、工学部授業アンケートの結果を基に、工学部教育のFD活動と教員相互の研修を目的として、平成17年度より毎年開催しています。

第8回目となる今回は、北野正雄工学部長の開会挨拶の後、高等教育研究開発推進センターの大塚雄作教授より、中央教育審議会答申と自学自習実態調査に基づいた今後の大学教育の在り方や学生の学びの実質化などについて話題提供がありました。

続いて、北野学部長より、国際高等教育院構想の観点から、新しい教養教育・基礎教育の実現について展望および話

題提供があった後、工学部から3名の教員が、授業内容の紹介や学生個々の理解度を向上させる工夫、授業中に学生を引き付けておくための取り組みを紹介しました。また、運営委員の加藤直樹教授より、入試の成績と入学後の学部の成績の間のさまざまな相関分析に有効な成績データベースについて紹介がありました。最後に、三ヶ田均新工学教育プログラム実施専門委員会委員長より、定点観測データに基づいた、学生の授業出席状況と成績の関係、また履修登録科目数と成績の相関関係についての分析結果報告がありました。本年も、講演終了後まで予定時間を延長して質疑応答が行われ、大変盛り多いシンポジウムとなりました。



### ◆工学部教育シンポジウムの経緯

1996年、大学院教育課程、国際競争力、達成度判定といったさまざまな角度から工学部の教育を検討し、工学部の教育を改善するという動きのもと、8大学工学教育プログラム委員会が発足しました。これは今もまだ続いている取り組みで、各大学から、産業界からの参加者を推薦していただくことによって、産業界の方々も巻き込んだ教育改善のための議論を展開しています。

2000年には、日本技術者教育認定機構(JABEE)を利用した、技術者教育プログラムの審査・認定評価を受けるための試行などが行われました。この流れを受けまして、京都大学工学部では、2000年に、工学部のFD活動推進の中心的存在として、新工学教育プログラム実施専門委員会を発足させました。

委員会発足直後に行われた特に顕著な取り組みは、2000年から2002年にかけて3年間にわたって行われた、ディベート型の工学部FDシンポジウムです。2回生、3回生対象の専門科目の幾つか、そして工学部の提供する全学共通科目について、学生のアンケートを取ったうえで、学生役、教官役、中立の立場と、役割を担っていただきながら、教育改善のためのディスカッションを行いました。この活動は日本工学教育協会工学教育賞、文部科学大臣賞を受賞しました。

これらの活動を受け、2004年以来、高等教育研究開発推進センターの推進する特色GP「相互研修型FDの組織化による教育改善」と共同して、工学部のFD活動で得られるデータを分析し、工学部の教育にフィードバックする取り組みを継続して行っています。そして、この取組の一環として、2005年以降、年に1回、工学部の授業アンケートの結果をもとに、工学部教育のFD活動と教員相互の研修を目的とした「工学部教育シンポジウム」を行い、工学部の教員・大学院生のための教育改善・情報共有の場を設けるようになってきました。2007年度より、全学レベルでFD研究検討委員会が発足してからは、FD研究検討委員会の協賛も得られています。



## 大学院生のための教育実践講座

### 大学院生のための教育実践講座とは

大学院生のための教育実践講座は、京都大学FD研究検討委員会が主催となり、将来、大学教育に携わることを希望している本学の大学院生（PD、研修員などを含む）のために、ファカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。

本講座では、初参加者向けの Basic コースと本講座参加経験者及び大学授業経験者向けの Advanced コースの2つのコースを設けています。2012年度で8回目を数え、Basic コースには32名、Advanced コースにも16名の参加がありました。参加者に対して、研修会直後に事後アンケートを実施して、コースに対する満足度を5件法（1:まったく満足していない～5:非常に満足している）で評価してもらったところ、Basic コースは平均4.38点（グループ討論：4.59、ミニ講義：4.41、ボディワーク：3.78）、Advanced コースも平均4.38点（模擬授業・検討会：4.47、グループ討論：4.60）となり、本講座に対する高い満足度がうかがえます。

### 2012年度（第8回）の実施概要

日時 平成24年8月7日（火）10:00～18:30

会場 京都大学百周年時計台記念館 2F

#### 実施プログラム - Basic -

- 9時45分～ 受付
- 10時00分～ 開会式  
挨拶 理事(教育担当) 淡路 敏之  
趣旨とプログラムの説明  
高等教育研究開発推進センター 特定准教授 酒井 博之
- 10時20分～ セッション1  
グループ討論1：(自己紹介)「大学の授業をどう思うか」
- 11時20分～ セッション2  
ミニ講義1：「大学授業の現在と未来」  
高等教育研究開発推進センター 教授 飯吉 透
- 11時45分～ セッション3  
ランチと自由討論
- 13時00分～ セッション4  
グループ討論2：「大学の授業で教師に求められるもの」
- 14時00分～ セッション5  
ボディワーク：「他者とのつながり・自分とのつながり」  
京都文教大学教授 濱野 清志
- 15時40分～ 休憩
- 15時50分～ セッション6  
ミニ講義2：「大学授業の現場から」  
高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤 礼之
- 16時15分～ グループ討論整理
- 16時30分～ セッション7  
全体討論：「大学で教えるために」
- 17時30分～ セッション8  
ミニ講義3：「大学で教えるために」  
高等教育研究開発推進センター長・教授 大塚 雄作
- 17時55分～ 閉会式  
挨拶・修了証授与  
理事(教育担当) 淡路 敏之
- 閉会式終了後 情報交換会(18時30分まで)





## 実施プログラム - Advanced -

9時45分～	受付
10時00分～	開会式 挨拶 理事(教育担当) 淡路 敏之 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター 特定准教授 酒井 博之
10時20分～	セッション1 全体討論1：(自己紹介)「教える側からみた大学授業」
11時45分～	セッション2 ランチと自由討論
13時00分～	セッション3 模擬公開授業・検討会 アフリカ地域研究資料センター 伊藤 義将 文学研究科 山中 延之
	休憩 (10分)
15時20分～	セッション4 グループ・全体討論
17時55分～	閉会式 挨拶・修了証授与 理事(教育担当) 淡路 敏之
閉会式終了後	情報交換会(18時30分まで)



## 研修会参加者からの感想 (事後アンケートより抜粋)

### ■Basic コースの参加者より

- ◆自分以外の大学院生、特に他の研究科の大学院生の教育に関する問題意識に触れることができ、新しい視点の形成に役立った。大学授業に関する課題として、具体的にどのようなものがあるのか、抽象的にどのようなものがありうるのかを認識することができた。
- ◆これまで知らなかった、世界での大学教育に対する取り組みをミニ講義で知ることが出来たし、グループ討論では大学の授業や教員の資質についての考え方を共有することができ、自ら考えるきっかけになった。参加型で多くの人と交流しながら実践的に学ぶことができた。
- ◆専門の違う院生と大学教育についてディスカッションする機会が日頃ないので、考え方の異同に目を開かされた。これだけ大学教育について熟を持って考えている人がいるということに刺激を受けることができた。
- ◆それぞれの学生がどのような意識をもって研究職をめざしているのかがわかり、勉強になった。また、実際非常勤の方の話が聴けて良かった。実際どのように授業を行っていくかは Advanced コースで学びたい。ミニ講座は内容が多様で面白かった。

### ■Advanced コースの参加者より

- ◆自分には非常勤講師としての経験がないため、もし講義を急に任されるようなことがあったときに、何も手がかりが無いように思っていた。しかし、今日の討論などを通じて、実際に経験のある方がどのような事に悩みどのような失敗をされ、どのような工夫をされているのかを垣間見ることができ、経験不足を多少なりとも補うことが出来た気がする。
- ◆まったく分野の異なる院生や研究員、講師の方たちと大学教育の在り方について討論する機会はめったになく、有意義に感じている。
- ◆普段お話す機会のない様々な専攻の方の忌憚のない意見を伺うことができ、有意義だった。
- ◆大学教育が抱える問題点とその解決案について、具体的に考え、知る機会が得られた。
- ◆教え方を具体的に教わることを期待していたが、教え方を自分で考えることを促されたように思う。そのことが、むしろ重要なことなのかもしれないと考えている。

● 当日の様子の映像は以下のサイトからご覧いただけます <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2012.php>



## 新任教員教育セミナー

### 【新任教員教育セミナーとは?】

新任教員教育セミナーは、2010年度に試行され、2011年度より本格実施されました。本年度が3回目の開催となります。このセミナーの目的は、「平成23年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」を対象として、「<京都大学らしい教育とはどのような教育か>を考え、<そうした教育を行うためにどのような教育サポートリソースがあるのか>、<大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか>を知っていただくことにあります。前期の教育経験をふまえながら、全学、部局、個々の授業という異なるレベルで京都大学の教育について理解・議論できるようプログラムを構成しました。研修の様子は京大OCW(<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/center-for-the-promotion-of-excellence-in-higher-jp/06>)にもアップされています。また、当日配布したパンフレット『京都大学の教育サポートリソース』もpdfでダウンロードが可能です(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/center/support-resource.pdf>)。ぜひご覧ください。



### 【概要】

日時:2012年9月7日(金)13:00~18:00

場所:京都大学百周年時計台記念館

参加人数:88名

内訳:教授14名、准教授19名、講師10名、助教45名

### 2012年度新任教員教育セミナープログラム

13:00	<b>開会式</b> (司会・進行: 高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈) 開会挨拶: 理事(教育担当) 淡路 敏之 趣旨説明: 高等教育研究開発推進センター長・教授 大塚 雄作
13:10	<b>セッション1: ミニ講義 1「現在の大学教育の動向と京都大学のポリシー」</b> 理事(教育担当) 淡路 敏之
13:30	<b>セッション2: ミニ講義 2「京大生の学習の実態」</b> 高等教育研究開発推進センター准教授 清上 慎一
13:50	<b>セッション3: ミニ講義 3「京大の教育的取組」</b> 「全学共通教育(ポケゼミ)」少人数教育部会部会長 吉田 純 「京都大学の国際教育」国際交流推進機構助教 渡部 由紀 「理学部の少人数担任制度」理学部少人数担任委員会委員長 福田 洋一 「京都大学の教育サポートリソース」高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代
14:45	<b>セッション4: ミニ講義「私の授業」</b> 人間・環境学研究科教授 鎌田 浩毅
15:15	休憩
15:30	<b>セッション5: グループ討論「京大でどう教え、指導するか」</b> <b>【ディスカッションテーマ / 事例紹介】</b> 1: 「アクティブ・ラーニング型の授業をつくる」学術情報メディアセンター教授 喜多 一 2: 「学力の低下、学生の多様化にどう対応するか?」工学研究科准教授 須田 淳 3: 「英語による授業をどう行うか?」農学研究科教授 天野 洋 4: 「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」経営管理研究部教授 若林靖永 5: 「困難を抱えた学生に向き合うには?」健康科学センター助教 上床輝久 6: 「博士課程院生のキャリア形成支援」キャリアサポートセンター教授 梅田幹雄 7: 「学習評価・教育評価の現在」高等教育研究開発推進センター長・教授 大塚雄作
17:00	休憩
17:15	<b>セッション6: ラップアップ</b>
17:50	<b>閉会式</b> 閉会挨拶: 高等教育研究開発推進センター長・教授 大塚 雄作



## ■セッション6のまとめ「各グループではどのような議論が行われたのか」

セッション5では、参加者が7つのテーマの中から自分の希望するものを選択し、テーマごとにグループに分かれてディスカッションが行われました。その結果は「セッション6：ラップアップ」で報告されました。各グループで行われたディスカッションの概要を以下に示します。

### グループ1「アクティブ・ラーニング型の授業を作る」

■従来型授業による学生への知識提供に加え、学生自らが体と頭を活発に活動させることでより一層の知識定着を図るために、教員はいかに授業を設計するかを題材として、セッションでは実際にグループによる討論型授業を経験した。グループ討論を終え、①教員としていかなる準備・心がけが必要か②実際にグループ討論を経験したことで得られた今後の指導方法のありかたは何か、が各グループにより報告され、それを題材としてグループ討論を行った。その成果として、前者に関しては「教員側が学生の心をつかんで、学生側のモチベーションをあげることで、コミュニケーションがより進化する」、後者に関してはアクティブ・ラーニングを実践するには教員側に「粘る、裏で動く、そして教員も楽しむ」の3点が必要であるとの共通認識を持つに至った。今回のセッションでの一番の成果は大人数講義においてもアクティブ・ラーニング型授業が実践できることを認識できたことだ。実際に100人規模で授業をされておられる先生の体験談を聞き、学生の受講姿勢の確立（予習の習慣づけと参加への慣れ）と有効な教材作成（明確なテーマを持つ教材とそれに基づく授業展開のシミュレーション）を行うことの重要性を再確認できた。

（報告者：農学研究科助教 川崎訓昭）



### 新任教員教育セミナー



### グループ2「学力の低下・学生の多様化にどう対応するか」

■最初に参加者から、このテーマに関してどういった問題を感じているかを出しあった。多くの人に共通していたのが、「まじめに出席していても単位が取れない学生がいる」「学力もさることながら学習意欲が低く、専攻の内容に関心をもっていない学生が少なくない」ということであった。このような問題に対して、須田先生から、工学部での取り組みや先生ご自身の授業での工夫を報告していただいた。工学部の取り組みの中では、サマーキャンプが興味深かった。これは、希望者を集めて、1回生、2回生、3回生それぞれのテーマを与えて、電気電子工学に関わることで何か物を作ったりする実習を、夏休みに3日間かけて行うというものである。希望者だけを集めてやるので、参加者はやる気満々の優秀な学生が多く、彼らがさらに輝くということだったが、一方で、成績の分布でいうと真ん中の6割ぐらいの学生でも、たまたま応募したり、少しやる気があって応募したりすることがあって、そういう学生もものすごく変わっていくという経験をされているとのことであった。そのような話を聞き、やはり問題点の共通している部分はモチベーションの低さというところにあるのと感じた。真ん中の6割ぐらいの学生のモチベーションを一人でも二人でもいから上げられるような取り組みを、授業外の活動も視野に入れてやっていかなければいけないということを実感した。

（報告者：医学研究科特定准教授 田中智洋）

### グループ3「英語による授業をどう行うか？」

■「問題点としては、「教官側」と「学生側」の各々に異なった問題点が存在するという前提でディスカッションをスタートした。「教官側」としては、英語で講義を行うこと自体に慣れていないことが、問題点としてまず挙げられた。解決方法として英語でのプレゼンテーションを高める事も必要であるが、基本的には授業のコンテンツ自体をしっかりしたものにするのが重要であるとの意見に集約された。また、日本語で行う場合に比べて、講義時間中の無駄な会話が減る傾向になるメリットもあり、英語での授業自体にそれほど大きなデメリットはないのではないかという結論に至った。次に学生側の問題点は、「英語による授業」に限らず、学部生と大学院生で授業に臨むモチベーションの違い、また、個々の英語力の違いが大きいので、両者について異なった体制作りが必要であるとの意見の集約が得られた。現行の授業体制を続けているとグローバル社会から取り残されていくというのは明白であろう。教官および学生が危機感を共有して、グローバル化していく学問の世界の中で成果を出して行くことを、ともに真剣に考える時期が来ているのではないかと強く感じた。

（報告者：医学研究科特定准教授 中村英二郎）



### グループ4「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」

■若林先生が「ソーシャル・メディアと題が付いているけれども、ソーシャル・メディアが大切なのではなくて、きちんとした授業をすることが大切ですよ」とはっきり言われたことが印象的であった。しかし、TwitterやFacebookなどのソーシャル・メディアや、LMSというLearning Management Systemを使うということは、それだけ講義にかかる時間を教員が割いているということであり、授業のことを考えて日ごろから活動しているということの表れとしてTwitterやFacebook、LMSの使用が自然に出てきているのだということを感じた。学生さんにTwitterなどを使ってライブ感を感じてもらうには、教員自身が気持ちを高めて、授業の前にほっぺたをたたいて「これから授業だ」という気持ちを高めて、授業中は自ら教員としての役割を演じるといって、熱い気持ちを持って講義をすることが非常に大切なのだと感じました。また、このような授業を個人が孤軍奮闘していても、局所最適化ということにしかならず、もし学部全体のカリキュラムを考える場になったら、その学部で最終的なゴール、何を学んで卒業するべきかということをしっかり考えた上で、トップダウンでいろいろな講義などを考えていく必要があるのではないかと感じました。

（報告者：理学研究科講師 常見俊直）



### グループ 5「困難を抱えた学生に向き合うには？」

■最初に学生が罹りやすいと思われる症例について簡単に話していただいた。その中で重要なポイントの一つとしてあげられたのは、学内にはカウンセラーや精神科医の先生方が待機されているので、教員は問題を抱えているであろう学生に対しては最小限の取り組みを行うことで十分であって、そのあとは専門家に任せようという話であった。教員が無理をして色々やりすぎず、それぞれの専門性にあわせて役割分担を行うことが大事だということであった。その後、各先生方の経験を踏まえて質疑応答や議論があった。例えば教員が学生のためにと考えて厳しく指導することがあった時に、指導された学生がそれを嫌がって、パワハラだと感じてしまうということもあり得ると思われる。そのような事態を防ぐためにも、何人かの先生方と協力してチームで学生指導にあたったり、日常生活の中で信頼関係を築いておいたりといった対応が必要になるかもしれない。学生指導に関しては、教員の人格が問われることが多いと思われる。従って、それも仕事の中の重要な点であると考えて、日ごろから努力することが大事ではないかと思われる。

(報告者：理学研究科特定助教 長谷部高広)

### グループ 6「博士課程院生のキャリア形成支援」

■梅田先生の事例紹介とその後の議論で出た話題の中で、興味深い話題を二つ紹介したい。まず一つ目が、梅田先生のスライドにもあった話だが、自身の教え子の90%は産業界に出るという前提で教育すべきということだ。教え子全員が自身の後継者になるという意識ではなく、90%は産業界に出して、産業界のために役立つ人材として教育するという考えが必要であるということを感じた。もう一つ、議論でも盛り上がった話題としては、自身の研究分野だけではなく、他分野と交流することが必要であるという話があった。自身の研究分野は、その研究分野だけに役立つものではなく、ほかの研究分野でも役立つことはあるだろうということ意識として持つことが重要であるということと、自身の研究分野を進める上で、他の研究分野の要素も採り入れることを考える必要があると感じた。キャリア形成支援の方法としては、そのような異分野交流ができることを学生に対しても支援するということや、自身の教え子がマスターからドクターに上がるときに、「君の研究分野はこの研究分野でも役立つから、そちらの研究室に行ってみたらどうだ」とか、逆にほかの研究室の学生さんに対して、「君の考えていることはうちのところでも役立つからどうだ」というような声かけを勧め、どんどん人材を交流していく、交流を促進していくということが必要であると感じた。このことは学生のみならず教員も、他の研究分野に対してどんどん飛び込んで吸収していくということも必要であるだろうと感じた。

(報告者：情報学研究科助教 高瀬英希)

### グループ 7「学習評価・教育評価の現在」

■「京大でどう教え、指導するか」という基調テーマに沿って、京大での学習評価の経験から課題点を出し合った。有効な評価を行うためには、「誰のために、何のために」行うかを明確にすることが欠かせない。「学生の(成長や自学自習の促進の)ために」を見失った評価に意味はない。ここで学生の人格評価を行うつもりで気負うと正確な評価が難しくなるだけでなく、レポートの結果を返さない、などの弊害が出ることもあるし、教員が自信を持って付けていない成績は、学生にも信頼されず、相互の信頼を損なうことにもなりかねない。該当講義における学生の「理解度・達成度」の評価を行うと考えれば肩の荷が下りるのではないか。必修/選択、学部/院、講義/実習により、「何のために」は異なる。評価手法として多く用いられるレポートや講義は、厳格な、あるいは妥当性の高い評価を行う上でそれぞれに注意点がある。特にレポートについては、将来の論文指導につながる面があるため、客観的な評価を、提出から時間をおかずコメント付で返してあげることが強い教育的価値を持つ。学生の理解を期待する内容を複数の観点(rubric)として整理し、多面的に重複的に評価を行うようにすれば、評価者内・間のばらつきも軽減できるのではないかと考えられている。そのうえで、学生同士の評価やTAの活用は、複数の目による評価がさらに妥当性を高めることになるし、何よりも教員の負担を下げるので、進んで検討したい。加えて、FDでの数々の議論を実践に結びつけるためには、FDの開催を続けるだけでは不十分で、学則の変更や授業時間など、システムレベルでの議論も欠かせない。

(報告者：医学研究科特定講師 猪飼宏)

### 【新任教員教育セミナーに対する参加者の評価】

#### ■全体の総合評価(回答者66名):平均値 4.00

(回答者内訳)

1. まったく有意義ではなかった: 0名
2. あまり有意義ではなかった: 6名
3. どちらともいえない: 7名
4. まあまあ有意義であった: 40名
5. 非常に有意義であった: 16名

#### ■セミナーの良かった点

- ・自分が感じたことが普通な問題であることを認識できた。それに対して他の方々の具体的な取り組みについて知ることが出来た。
- ・普段知ることのできない他学部・研究科での取り組みを知ることができた。
- ・学生の現状とそれに対応する取り組みを初めて知ることができた。具体的方法論もあり、今後の指導に役立てたい。
- ・京都大学として目指している大学(教育)としての方向性がわかった。
- ・これまでの自身のキャリアを見つめなおし、今後を展望するきっかけを与えてもらった。刺激を与えられた。

#### ■セミナーの改善すべき点

- ・セッション1と2はネット上の報告という形でのよいのでは、と思った。教育セミナーのはずなのに、「報告」「現状説明」が中心になっていることは残念だった。教育セミナーなら、より具体的な内容を取り入れてほしい。
- ・グループ討論の参加者のニーズ、関心も様々あり、更なる分割(二分の一?)が出来ると問題への対処法が議論できて有意義だったと思う。今回は問題点のリストアップに重点が置かれがちであったと感じた。
- ・セッション5のグループ討論がもう少し長くてもよいと思う。分野特有の意見を聞くことが出来るので面白い。
- ・最後のラップアップは、グループ間の情報共有という意味ではあまり機能していないように感じた(他グループの話は、ちょっと聞いただけでは理解できなかった)。むしろグループ討論に時間を使って欲しいと感じた。
- ・大学院に求められていること・課題と、学部で求められていること・課題は違うので、トピックや議論は分けるべきではないか。







## 旧高等教育教授システム開発センター及び高等教育研究開発推進センターの 企画による公開授業・検討会

1996～1998年度 第Ⅰ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

	講義名	講師	日時	場所
通年 公開	「ライフサイクルと教育」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育教授システム 開発センター教授	毎週月曜日 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～	楽友会館2階

1999～2003年度 第Ⅱ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

	講義名	講師	日時	場所
通年 公開	「ライフサイクルと教育」 全学共通科目A群※	田中 每実 高等教育教授システム 開発センター教授 ほか 〔リレー式〕	毎週月曜日 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～	楽友会館2階

※セメスター制への移行に伴い、2002年度から「ライフサイクルと教育A」（前期）、「ライフサイクルと教育B」（後期）として実施

■第Ⅰ期・第Ⅱ期公開実験授業プロジェクトの詳細については、

「大学授業のフィールドワーク-京都大学公開実験授業-」（京都大学高等教育教授システム開発センター編 2001年3月 玉川大学出版部）、  
「京都大学高等教育叢書19 平成15年度公開実験授業の記録および公開実験事業8年間の中間的総括」（平成16年3月）ほかをご覧ください。

### 2004年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「デジタル制御」 工学部専門科目（3回生対象）	萩原 朋道 工学研究科教授	12月1日(水) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:15～17:30	電気総合館1階 大会議室
第2回	「経済原論ⅡB」 経済学部専門科目	八木 紀一郎 経済学研究科教授	12月7日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:10～13:30	法経0番教室
第3回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育研究開発推進 センター教授	12月13日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第4回	「電気電子工学概論」 工学部専門科目（1回生対象）	大澤 靖治 工学研究科教授	1月11日(火) 5時限 16:30～18:00	工学部 電気総合館3階 中講義室

### 2005年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	松下 佳代 高等教育研究開発推進 センター教授	5月23日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第2回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	大塚 雄作 高等教育研究開発推進 センター教授	6月20日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第3回	「現代制御論」 工学部専門科目 (情報学科3回生担当)	山本 裕 情報学研究科教授	10月20日(木) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:00～13:20	工学部総合校舎 213号室
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育研究開発推進 センター教授	11月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第5回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	米谷 淳 神戸大学 教育推進機構教授	11月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第6回	「酵素化学」 農学部専門科目 (食品生物科学科3回生担当)	井上 國世 農学研究科教授	12月14日(水) 1時限 8:45～10:15 検討会 10:30～12:00	農学研究科2号館 応用生命科学専攻 第4セミナー室
第7回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	大山 泰宏 高等教育研究開発推進 センター助教授	12月19日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2006年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	井下 理 慶應義塾大学 総合政策学部教授	6月5日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階



	講義名	講師	日時	場所
第2回	「現代の大学・大学生論A」 全学共通科目A群	溝上 慎一 高等教育研究開発推進 センター助教授	7月4日(火) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	吉田南総合館 共25
第3回	「心理学概論B」 全学共通科目A群	大山 泰宏 高等教育研究開発推進 センター助教授	11月21日(火) 1時限 8:45～10:15 検討会 16:20～17:30	吉田南構内 4共21
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	矢野 裕俊 大阪市立大学 大学教育研究センター教授	12月4日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2007年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「教育評価の基礎I」 全学共通科目A群	大塚 雄作 高等教育研究開発推進 センター教授	5月22日(火) 3時限 13:00～14:30 検討会 14:35～15:45	吉田南1号館 共311
第2回	「工学倫理」 工学部専門科目(4回生対象)	水谷 雅彦 文学研究科教授	10月12日(金) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:00	電気総合館中講義室 (吉田南構内) 電気第2講義室(A1-131) (桂柳バス) [遠隔講義]
第3回	「学力・学校・社会」 全学共通科目A群	松下 佳代 高等教育研究開発推進 センター教授	10月25日(水) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:00	吉田南1号館 共206
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	近田 政博 名古屋大学高等教育 研究センター准教授	11月19日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2008年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「生活と環境の化学」 全学共通科目B群	山本 行男 高等教育研究開発推進 センター教授	5月8日(木) 3時限 13:00～14:30 検討会 14:40～15:40	共北25 (吉田南構内)
第2回	「英語II A (E2PO2)」 全学共通科目C群	Craig Smith 京都外国語大学教授	6月16日(月) 5時限 16:30～18:00 検討会 18:05～19:00	共西02 (吉田南構内)
第3回	「教育史概論I」 教育学部専門科目	辻本 雅史 教育学研究科教授	11月26日(水) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:40	教育学部320 (本部構内)
第4回	「診断治療学総論」 医学部専門科目	森本 剛 医学研究科講師	1月20日(火) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:20	臨床第1講堂 (病院地区)

### 2009年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田口 真奈 高等教育研究開発推進 センター准教授	12月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:30～17:30	共北12 (吉田南構内)
第2回	「診断治療学総論 -医療で求められる コミュニケーション-」 医学部専門科目	平出 敦 医学研究科教授	1月12日(水) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:30～17:30	山内ホール (芝蘭会館)

### 2010年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「心理的ストレスと適応」 全学共通科目A群	及川 恵 高等教育研究開発推進 センター特定准教授	7月20日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:15～13:15	共北12 (吉田南構内)
第2回	「半導体工学」 工学部専門科目	須田 淳 工学研究科准教授	10月5日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:30～13:30	電気総合館1F 大講義室 (本部構内)

### 2011年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「情報と教育」 全学共通科目A群・B群	稲葉 利江子 情報学研究科情報教育 推進センター特定講師	7月12日(火) 5時限 16:30～18:00 検討会 18:15～19:15	学術情報メディア センター南館201 (吉田南構内)
第2回	「音響心理学概論」 全学共通科目A群・B群	酒井 博之 高等教育研究開発推進 センター特定准教授	11月1日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:15～13:15	吉田南1号館 1共23教室



---

**2013年3月 京都大学FD研究検討委員会発行**

京都大学のFDに関する取り組みについては、

**FD研究検討委員会のホームページ**

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。

公開授業・検討会を企画される場合は、

**学務部教務企画課(電話 075-753-2430)** まで連絡ください。

---





京都大学のFD

2012 Mutual Faculty Development